

ないが、口腔衛生の向上にかなり寄与できたものと思われる。他、広報や種々の集会の機会を利用して、啓蒙活動を行っているが、最も意識の低い、最も啓蒙の必要な層がいつも落ちこぼれている現状も否定出来ない。本当の意味の予防活動の展開はこれからだと思っている。

### 演題3. 本学小児歯科外来における外傷患者の臨床的観察

○伊藤 雅子, 野坂 久美子, 守口 修,  
小野 玲子, 甘利 英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

昭和55年～60年までの6年間に当科外来を受診した小児外傷患者 255名について、外傷状態ならびにそれに対する処置内容、経過について検索した。その結果、乳歯外傷は151人(264歯)、永久歯66人(110歯)軟組織のみ37人であり、男女比はいずれも2:1で男子の方が高かった。年齢別の出現率は、乳歯では、1, 2歳児が最も多く両者で約60%を占め、永久歯では、8歳児が約24%で最も高かった。歯種別は、乳歯ではAが最も多く64%、次いでB16.3%、A11.4%であり、永久歯では、1 80%、2 8.2%、1 7.3%の順であった。月別の外傷患者数は、乳歯では季節の変わり目に高い出現率を示したが、永久歯では月別の変化はあまり見られなかった。1人当たりの外傷歯数は、乳歯、永久歯ともに上顎において1歯が最も多かった。受傷から来院までの期間は、乳歯、軟組織では、1日目が最も多く、次いで当日であったが、永久歯では当日、1日目が最も多かった。受傷原因は、強打が32.6%と最も多く、次いで転倒の31.8%であった。外傷状態は、乳歯では脱臼が53%、永久歯では歯冠破折が45.5%で最も多く、歯根破折は、乳歯、永久歯ともに最も少なかった。外傷状態と歯種との関連性は、乳歯では完全脱臼がAに多く、他の外傷状態はいずれもAで最も高い出現を示した。永久歯では歯頸1/2の歯根破折を除いては、1が最も高い出現であった。年齢別の外傷状態は、乳歯では不完全脱臼が1, 2歳児に多く、永久歯では脱臼、動揺が9歳以前に集中していた。処置内容は、乳歯、永久歯ともに歯冠破折に対しては、充填、RJCrが多くを占め、不完全脱臼、重度動揺では、固定あるいは整復固定が最も多かった。また、抜歯は従来の報告に比べ非常に少なく、と

くに乳歯で16.3%であった。乳歯の抜歯は、不完全脱臼では完全脱臼に近い重度のもの、歯根破折では歯頸1/2の部位のものが多かった。また、露髄、軽度動揺の抜歯は、1例を除いて全て1カ月以上経過してからの来院であった。

### 演題4. 先天性多数歯欠損を伴う若年者の補綴処置の一例

○古川 良俊, 佐藤 理一郎, 石橋 寛二,  
中野 廣一\* 石川 富士郎\*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座\*

日常の臨床において、先天性の多数歯欠損症例に遭遇することは比較的まれなことである。今回、我々は15歯先天性欠損症例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

患者は18歳の女性で、前歯部審美障害を主訴に、昭和59年7月17日に岩手医科大学歯学部矯正歯科および第二補綴科を受診した。家族歴、既往歴、現病歴に特に問題になる点は認められない。前歯部から小白歯部にかけて歯間スペースがあり、全体的に歯の倭小化傾向が認められ、欠損部位にX線写真上でも歯胚が観察されず、抜歯の既往もないことより、

Partial Anodontia (  $\frac{8\ 5\ 4\ 2}{8\ 7\ 5\ 2} \mid \frac{2\ 4\ 8}{3\ 5\ 7\ 8}$  欠損) による空隙歯列および  $\frac{D}{E} \mid \frac{D}{CE}$  乳歯残存と診断した。

本症例では、若年者特有の心理的特性(容姿に対する強い願望や劣等感)から、早期の審美性回復により心理的負担を軽減する必要があった。そこで、補綴前処置として歯の移動を行い歯間スペースを整理し、接着性レジメンを応用した暫時的橋義歯により審美性と咬合の回復を試みたところ、良好な経過を得ることができた。しかし、偏心位咬合誘導の確立が不十分で、口腔内環境が安定する4~5年後に、最終補綴処置で回復する予定である。

今回、このような症例にたずさわって、複数科によるチームアプローチの重要性が示唆された。

### 演題5. 歯科処置に全身麻酔を必要とした症例の検討

○渋井 暁, 水間 謙三, 佐藤 雄治,

岡村 悟, 野館 孝之, 藤岡 幸雄,  
中里 滋樹\*, 大坂 博伸\*, 木村 貞昭\*\*  
関山 三郎\*\*, 岡田 一敏\*\*\*, 涌沢 玲児\*\*\*

新津 二郎, 佐々木 保\*, 金子 良司\*\*,  
武田 泰典\*\*, 鈴木 鍾美\*\*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座  
盛岡県立中央病院歯科口腔外科\*  
岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座\*\*  
岩手医科大学医学部麻酔学講座\*\*\*

盛岡市立病院歯科  
笹川小児歯科医院\*  
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座\*\*

歯科治療を受ける患者の大半は、局所麻酔下での歯科処置である。しかし、心障者ならびに全身的な合併症を有する患者の治療中の不随意運動に術者がひとりで対処することは、困難である。そのために、全身麻酔下での歯科処置が必要とされる。今回、我々は昭和52年より昭和60年までの9年間で24例の歯科治療患者に全身麻酔管理を依頼されたので、それらの概要と症例の一部を報告した。

症例は、全症例とも入院下に行い、施術場所は、手術場15例、外来9例であった。年度別全身麻酔症例数では、昭和57年、58年がともに6例と多く、年齢性別症例数では、全例が30歳未満で、11歳～30歳未満が20例(83%)と最多であり、性別では男性17例、女性7例であった。全身麻酔を必要とした基礎疾患は、CP(脳性麻痺)とMR(精神発達遅滞)が多く、これらは他の付随する疾患を含めて計21例であった。施術内容は多種多様であったが、そのうち抜歯、歯槽骨整形や歯肉切除などの口腔外科処置単独が9例と最多で、つづいて、これらの口外処置に即日充填処置、歯内療法処置、補綴処置を伴った症例が計11例であった。麻酔前投薬は、精神安定薬のMinor-tranguilliserは全例に、ベラドンナ剤のAtropineは21例(87.5%)に、鎮痛薬は麻薬であるPethidineが22例(91.7%)に使用された。麻酔導入薬および導入法は、バルビタール剤のThiamylal-Naによる急速導入が18例(75%)と最多で、術中の主維持麻酔薬は、笑気・酸素・ハロセンのGOFが15例(62.5%)と最多であった。気道確保法は、経鼻気管挿管が22例(91.7%)と圧倒的に多く、施術時間は1～3時間未満、麻酔時間は2～4時間未満が、それぞれ14例(58.3%)と最多であった。術中、術後の合併症では、覚醒途上に興奮がみられた2例と抜管時に癲癇発作の出現した1例があったが、適切な処置により緩解し、重篤に至った症例はなかった。

演題6. 歯肉に生じた giant cell fibroma の1例

口腔粘膜に生ずる giant cell fibroma は、1974年に Weathers と Callihan が増殖線維性結合組織中に紡錘形ないし星形の細胞と、多核巨細胞を含む特徴ある病変 108例を検出し、独立疾患として提唱されたものである。また、1982年、Houston は、本病変の464例について追試している。

しかし、本邦では本病変名で取り扱われた症例はいまだに報告されていない。

最近我々は、giant cell fibroma と診断を下した1症例を経験したので、報告する。

症例は、3歳の女児で、歯肉の腫脹を主訴として来院。口腔内所見は、上顎左側第一乳臼歯部舌側歯肉に大きさ約15×5×4mmの限局した無茎性の、被覆粘膜は軽度の発赤を伴った腫瘤を認めた。同部はX線的に変化はみられず、臨床的に Epulis の診断で、全身麻酔下に切除術を施行した。

組織学的に、多くの小さな血管を伴いながら、太いあるいは細い線維が荒く錯走増殖し、この増殖線維性結合組織中に紡錘形あるいは星形の細胞と、多形を示す多核巨細胞が多数介在していた。巨細胞の中にはラングハンス巨細胞に類似のものもみられた。

Weathers や Houston は、本病変の特徴を次のように記載している。すなわち、肉眼的には一般に非対称性の腫瘤で、有茎性で小さなものが多く、その多くは1cm以下である。発症部位は、歯肉、舌に多く、その他、口蓋、頬粘膜、口唇にもみられている。発症年齢は20歳代までに多く、全例の60%を占め、性別では女性にやや多くみられている。臨床で下される診断名は、線維腫と乳頭腫が多く、全例の約77%を占めている。治療法は、そのほとんどに切除術が施行されている。

我々の症例は、組織的にも臨床的にも、giant cell fibroma の特徴を有するものであり、切除後5ヶ月経過している現在、再発等の異常所見はみられていない。

演題7. 下歯槽神経に生じた amputation neuroma の一例